

『アッサンブラージュ、エンバイロメント、ハプニングス』(1966)における具体美術協会とアラン・カプローの関わり

大阪大学 武澤 里映

戦後アメリカでハプニングという独自のパフォーマンス形式を創始したアラン・カプローは、その代表的著作『アッサンブラージュ、エンバイロメント、ハプニングス』(1966)(以下、『A, E & H』)において、具体美術協会(以下、具体)をハプニングの先駆的存在として位置付けた。この二者の関係性は、これまで双方の作品の相違などから説明されてきたが、実際の交流の詳細はいまだ明らかではない。本研究では、同書を巡ってのカプローと具体の関わりを、特に具体のリーダーである吉原治良(1905-1972)らがどのようにハプニングを理解していたのかに着目して考察する。これにより、米国から受容されたハプニングという概念をめぐる具体の国際評価と海外への広報戦略について、その一端を明らかにしたい。

カプローによる『A, E & H』での具体の紹介は、その初期の活動が自身が初めてハプニングを行った1957年より前から行われていた先駆性を評価している。一方、同書に掲載された写真は、計16枚のうち10枚が舞台を使った作品で、初期の活動で代表的な野外の作品は3枚であり、具体の初期とされる1954年から1957年以降の作品も含んでいるなど、カプローの文章とは異なる特徴もある。これらの写真は、写真背面の吉原による説明と近年見つけられた書簡から、1963年ごろに掲載にあたり吉原からカプローへ送られてきたものだとわかっている。こうした特徴から推定されるのは、カプローが具体を評価した点と、具体がカプロー宛に写真を選び送った際に自身の活動を評価した点が異なっている可能性である。

本研究では、カプローがどのように吉原に写真掲載を依頼したのか、その際どのような基準で写真が選ばれたのかについて、特に1960年代初頭の日本でのハプニングの受容状況を手がかりに検討する。1959年にアメリカで始められたハプニングは、『A, E & H』の出版以前では、日本では一柳慧などの音楽家によって受容されていた。吉原はアメリカでハプニングを見る機会がなく、具体のメンバーとカプローの直接の対面は吉原の没後1993年まで実現しなかったことから、吉原の選択にこうした日本の状況が関わっている可能性は高い。また、カプローから吉原への写真掲載の依頼には、大阪日日新聞の美術記者であった大口義夫が仲介していたことが分かっており、カプローと具体の関係性は間接的だったと推定される。

本研究ではまずカプローによる具体の評価を当時の資料から整理する。その後、吉原がどのような依頼を受け写真を選択したのかについて、一柳や大口などの日本の状況を基に考察する。これにより、ハプニングの理論として国内外に流布していった『A, E & H』において、カプローによる評価とは異なる面を吉原が意識していた可能性を考察し、戦後美術史における日米の相互関係の内実を探りたい。